

令和7年9月24日

浦添市議会議長 殿

建設委員会
委員長 稲嶺 伸作

建設委員会視察報告書

令和7年8月4日から令和7年8月6日まで、委員会視察を実施いたしましたので、下記のとおり報告します。

記

- 1 視察期間 令和7年8月4日（月）～令和7年8月6日（水）
- 2 視察場所 大阪府堺市、日本館（大阪・関西万博）、津波・高潮ステーション
- 3 視察項目
 - 大仙公園整備運営事業
 - 「循環」をテーマとした持続可能な未来のまちづくりについて
 - 津波・高潮に関する防災対策について
- 4 視察参加者 稲嶺伸作 仲西次男 大城翼
儀間光秀 上原聖也
- 5 調査内容 別紙のとおり

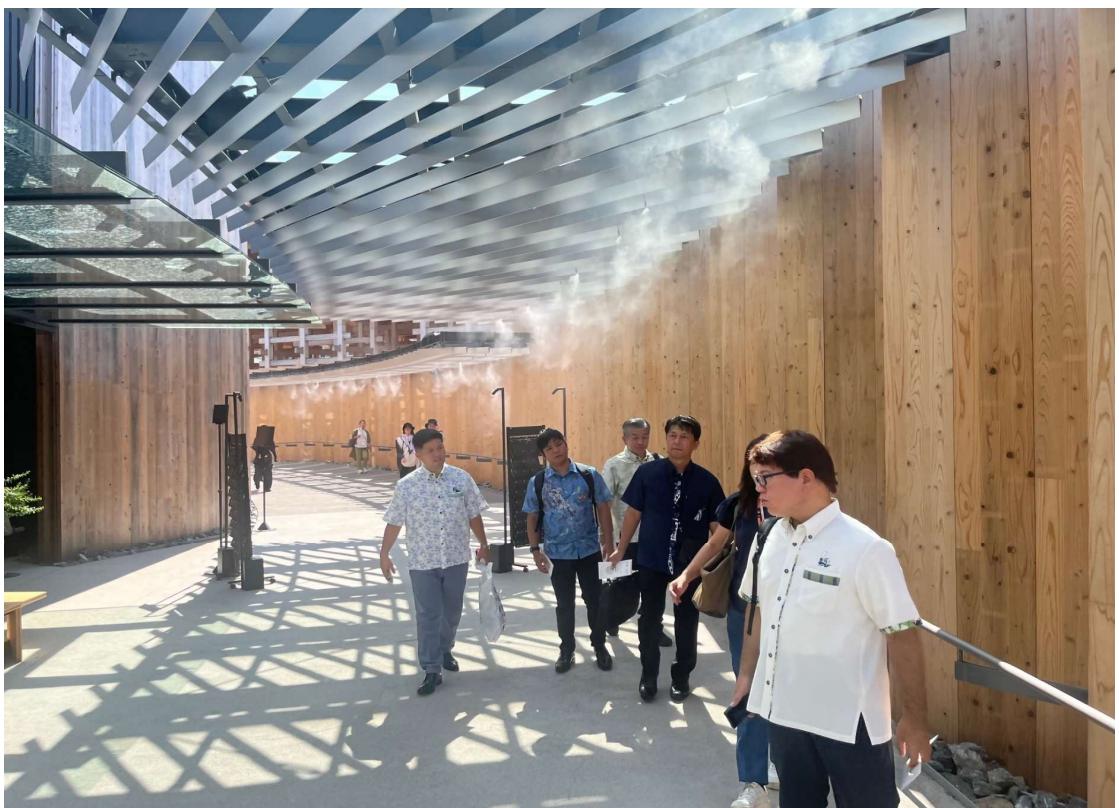
委員会名：建設 委員会

視察日	令和7年8月5日(火)
視察先	大阪府堺市 人口 804,388人 (令和7年5月1日現在) 市面積 150 km ² 議員定数 48人
視察市の概要	堺市は、世界最大級の墳墓である仁徳陵の造営地として古くから開け、また中世の南蛮貿易で栄えた自治都市として輝かしい歴史を有している。平成8年4月、堺市は中核市に移行し、同17年2月、隣接する美原町と合併、さらに、同18年4月に全国で15番目の政令指定都市に移行し、新たなまちづくりを開拓している。
調査項目	大仙公園整備運営事業
調査理由	
本市においても、公園の魅力向上や維持管理経費の縮減が大きな課題となっている。Park-PFI事業について、その仕組みや効果、導入にあたっての課題を調査し、本市における公園整備・管理のあり方を検討するため。	
調査内容	(1) 大仙公園の概要について (2) 大仙公園整備運営事業について (3) 大仙公園事業で見込まれる効果について (4) 今後の課題等について
考察	<ul style="list-style-type: none"> 市の財源負担を抑制し、且つ、賃貸収入を得ることで二重のメリットが得られる。 百舌鳥・古市古墳群が令和元年7月に世界遺産登録されたことを契機に、世界最大級の古墳・仁徳天皇陵古墳に隣接する大仙公園内の飲食・物販施政の整備を図った。 10月には気球にのって世界遺産を望む事業が開始する予定。 浦添市もモノレール3駅周辺の整備、浦添運動公園のPFI活用を進めており、物価高騰(資材高騰、人手不足)の影響で円滑に進んでいない。 質疑応答でも管理運営を中心に関係者から積極的に質問が出た。先進事例として浦添市に活かしたい。 年間来店者は2~4万人規模。観光客だけでなく地元住民も利用し、夜間コンサートやマルシェ等多様なイベントが開催。課題として、季節・天候による利用変動、情報発信機能の不足が指摘された。 地元事業者・団体との連携で地域回遊性を高め、観光消費拡大が期待できる。 季節変動や利用者層に応じた柔軟な運営計画、積極的な情報発信が成功の鍵となる。 大仙公園の事例は、世界遺産を背景に民間活力を効果的に導入した成功例であり、観光と地域振興を両立させる好事例と感じた。当市においても、公園や観光資源を活用し、地域活性につながる仕組みとして参考にすべきと考える。 当市にPFIを活用するには、公共交通機関の充実(アクセス)を図る必要等、課題があると感じた。 PARK-PFIについて、先進的な取り組みとして、併設された民間事業の内容を確認できた。今後は気球を使って古墳を見たりするなどこれからも賑わいを創出するものと感じた。浦添市においても民間業者の力を借りて、更に観光事業や公園を活用した取り組みの参考としていきたい。



委員会名：建設 委員会

視察日	令和7年8月5日（火）
視察先	大阪・関西万博 会場場所 大阪府大阪市此花区 人工島「夢洲」 会場面積 約155ヘクタール
視察先の概要	
<p>「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとしている。コンセプトとして1. 展示をみるだけではなく、世界80億人がアイデアを交換し、未来社会を「共創」（co-create）。2. 万博開催前から、世界中の課題やソリューションを共有できるオンラインプラットフォームを立ち上げ。3. 人類共通の課題解決に向け、先端技術など世界の英知を集め、新たなデザインを創造・発信する場としている。また、大阪・関西万博のシンボルである大屋根リングは、「最大の木造建築物」として、2025年3月4日にギネス世界記録に認定されている。</p>	
調査項目	
<p>「循環」をテーマとした持続可能な未来のまちづくりについて</p>	
調査理由	
<p>大阪・関西万博日本館への視察においては、日本館が掲げる「循環」をテーマとした展示内容や、最先端の環境配慮技術、循環型社会の実現に向けた取り組み等を実際に見聞きすることで、当市の施設等のあり方や都市の将来像を考えるうえで貴重な知見を得ることができると考えている。</p> <p>日本館においては、脱炭素社会の実現に向けた先進事例や、都市機能と自然環境との調和を図る取り組みが数多く紹介されており、持続可能な都市計画の策定等に大いに参考となることが期待される。</p> <p>以上の観点から、大阪・関西万博日本館の視察を通じて得られた知見を今後の委員会活動に反映させることを目的とする。</p>	
調査内容	
<p>(1) 生ごみ由来のバイオガスの利活用について (2) CO₂の排出を実質的にゼロにする「カーボンニュートラル」を実現するにあたっての考え方について (3) 展示を通じて得られる環境意識を高める手法について</p>	
考察	
<ul style="list-style-type: none"> ・生ゴミからバイオガス、生ゴミ分解後の残水の浄水技術、藻類とバイオプラスティックを混合した素材の商品開発等、日本の産学官が有する先進技術がカーボンニュートラルの社会を牽引する可能性を感じた。 ・日本館は「いのちをつなぐ、未来につなぐ」をテーマに、日本の自然・文化・技術を体験的に紹介する施設であり、来場者に持続可能な社会づくりの重要性を発信している。 ・来場者参加型の演出により、世代を問わず理解しやすい工夫が施されている。 ・「体験を通じて学びを深める」展示設計が印象的で、市内イベントや観光施設にも応用可能。 ・視覚・聴覚・体感を組み合わせることで、情報発信の効果が高まると実感。 ・持続可能性や地域資源の価値を来訪者に直接伝える重要性を再認識した。 ・キャンプ・キンザー跡地を鑑みたとき、ある程度の国策的誘致（投資）を行い、人流・物流・人材育成等の取り組みの必要性を感じた。 ・各国の先進的な取り組みに触れ、近い将来、沖縄県においても万博を誘致できればプラスな方向になっていくのではないか。 ・民間交通の大切さを改めて感じる機会となった。 	



委員会名：建設 委員会

視察日	令和7年8月6日（水）
視察先	津波・高潮ステーション 大阪府大阪市西区江之島2丁目1番64号
視察先の概要	
大阪府西大阪治水事務所が所管する防潮堤や水門の津波・高潮防ぎよ施設の一元管理を行う「防災棟」と、府民の防災意識の向上を目的とした「展示棟」を併せ持つ施設。「展示棟」はかつて大阪を襲った高潮や、近い未来必ず大阪を襲うと言われている南海トラフ巨大地震と津波について正しい知識を習得していただくとともに、地震、津波発生時の対応などを学べる、広く開かれた施設。	
調査項目	
津波・高潮に関する防災対策について	
調査理由	
南海トラフ巨大地震は明日起こっても不思議ではない大災害。当市においても大災害に対する対策を早急に策定する必要があると考えたため視察を行った。	
調査内容	
津波・高潮に対する取り組みについて	
考察	
・慶長地震、宝永地震、安政地震、昭和地震とくりかえしてきた地震・津波の教訓を次世代に継承し、生命と財産を守るための施設。また、海拔0メートル以下の地帯に100万人以上が暮らしている地理的事情から防波堤、防水団などの設備や対策も学ぶ。 ・展示方法や設備の造りは自助・共助・公助について真剣に考えさせる最適な機会の場。浦添市また広域で沖縄県内にも同様の施設を設置する必要性を感じる。 ・視覚・体験型の展示は、防災知識の定着に有効であり、学校教育や地域防災訓練への活用が期待できる。 ・自然災害の脅威をリアルに体感することで、早期避難の重要性を強く認識できた。 ・浦添市においても、防災啓発施設やイベントでの体験型学習を強化することで、市民の防災意識向上につながると感じた。 ・災害にはまず予防のための取り組み、また被災された時の迅速な対応、それに向けてのシステムづくりの構築を急ぐ必要があると感じた。	

